

【地域教育実践報告】

埼玉県東秩父村における教育実践報告②

——中山間「ふるさと支援隊」の活動を中心として——

三國信夫*

キーワード：消滅可能性自治体、ふるさと支援隊、東秩父村、協創力

1. はじめに

本稿は、埼玉県東秩父村にて実践された、経営学部3年生および4年生におけるゼミナール活動について報告するものである。

2024年度に、経営学部3年生と4年生のゼミナールの活動が埼玉県中山間「ふるさと支援隊」として正式に採択されたことから、本紀要前号においてもこの活動を中心とした報告を行ったが、本稿はその続編にあたる。

東秩父村は、埼玉県北西部の秩父郡に属する、埼玉県内唯一の村であり、古くから「和紙の里」として知られる一方で、少子高齢化および人口減少が進み、消滅可能性自治体に選ばれてしまうなど、村としての活力を失うことや、村の存続そのものを心配する声も上がっている。

このような危機に直面した東秩父村をフィールドとして、村の実情について深く学ぶこと、さらには村の魅力を学生たち自身の手であらためて探し出すこと、この2つを大きな目的に掲げてゼミナール活動を行った。2024年度に続く、2年目の活動記録である。

2. 埼玉県中山間「ふるさと支援隊」として活動をはじめた経緯

2.1 中山間「ふるさと支援隊」

埼玉県中山間「ふるさと支援隊」（以下、「ふるさと支援隊」と表記する）は、過疎化・高齢化で農林業や地域活動の維持が難しくなる中山間地域に若者の感性と専門知識を呼び込み、地域に活力をもたらす学生の活動を県が支援する制度で、2010年度開始、2023年度までに延べ54隊が活動に取り組んできた。参加を希望するゼミは活動地域を決定し、活動計画書を作成して審査会でプレゼンテーションを行う。合格後は年度単位で活動し（審査に通れば継続可）、秋には活動報告・交流会（中間報告会）があり、各大学が報告した後、大学横断のグループで課題討議と解決策提案を行って親睦と相互学習を深める。昨年度の活動として、2024年10月7日の中間報告会を契機に、城西大学と立教大学の交流が始まり、立教大学ゼミの東秩父村訪問時に三國ゼミが同行・案内するなど連携が進み始めた。年度末には1年の成果報告の機会があり、2025年度は2026年2月に実施予定とされる。

* 城西大学経営学部／城西短期大学ビジネス総合学科准教授

3. 2025年度「ふるさと支援隊」の活動内容

2024年度に始まった「ふるさと支援隊」の活動であるが、2025年度には、前年度から継続して行った活動と、今年度から新たに組み込んだ活動があった。

継続して行われた活動としては、「東秩父村通信」の発行がある。各号のテーマは異なるものの、編集テーマに沿って取材、編集、発行するという活動は継続して行った。また、稲刈りや楮の皮むき作業という農作業も、「ふるさと支援隊」のなすべき仕事としてあることから、継続して行った（楮の皮むきに関しては、予定としてはあるものの、この原稿執筆時点ではまだ実施していない）。高麗祭での東秩父村PR活動や、地域連携活動報告会への参加も、継続して行った。インバウンド訪日外国人旅行者へのPR活動も、前年度に継続して実施予定となっている。

一方で、ボードゲームの制作や、東秩父村の子どもたちとの交流会は、新しい試みであった。特に、子どもたちとの交流会は、野球というスポーツを通して、今後も継続して行われることが期待される。

なお、天空のポピー復活に関するイベントや、宿泊行事などは、諸般の事情により実現に至らなかった。

3.1 2025年度城西大学公開講座における発表

毎年、城西大学では、教育研究の成果を広く地域に開放し、高度化、多様化する地域住民の学習意欲と地域社会のニーズに応えるために、秋学期に複数回の公開講座を開講している。2025年度は、「地域を元気にする城西大学の挑戦」というテーマで、4講座を開講することが予定されていた。

2025年9月24日に開催された第4回公開講座は、経営学部における三國ゼミナールの活動がテーマであった。「消滅可能性自治体を救え！～東秩父村における、『中山間ふるさと支援隊』としての経営学部三國ゼミナールの活動記録～」というテーマで、地域の方に105分間の活動報告を行った。

なぜ、三國ゼミナールが「ふるさと支援隊」の活動を始めるようになったのか、なぜ東秩父村なのか、東秩父村の現状はどうなっているのか、ゼミナールの具体的な活動はどのようなものか、という内容であった。

東秩父村における観光・地域資源の再発見と発信	
表紙	② 2024年度の活動実績
目次	・ 東秩父村槻川小学校との共同稲刈り作業
選んだ理由	・ 東秩父村での楮の共同皮むき作業
2024年度	・ 東秩父村PRパンフレット「東秩父通信」の発行(3回)
2025年度	・ 杉並区和田中学校での出前授業
	・ インバウンド訪日外国人に向けた東秩父村PR活動(浅草)
	・ インバウンド訪日外国人に向けた英語版「東秩父通信」の発行(1回)
	・ 学内における広報活動(高麗祭、地域連携活動発表会等)

図3.1 2025年度「ふるさと支援隊」審査発表資料

東秩父村における観光・地域資源の再発見と発信	
表紙	③ 2025年度の活動(活動目標)
目次	・ 「東秩父通信」の継続発行
選んだ理由	・ 「東秩父魅力再発見動画」の統編制作
2024年度	・ 天空のポピー復活に関するイベントや情報発信
2025年度	・ ボードゲームの創作と槻川小学校の児童との交流
	・ 大学内における広報活動(高麗祭、地域活動報告会等)
	・ 杉並区和田中学校での出前授業
	・ インバウンド訪日外国人に向けた東秩父村PR活動(浅草)と英語版「東秩父通信」の発行(1回)

図3.2 2025年度「ふるさと支援隊」審査発表資料

教員とともに、ゼミ生が教壇に立ち、スライドで活動の様子がわかる写真などを示しながら説明を行った。

受講者からは「『ふるさと支援隊』として大学生が地域の課題に取り組んでいることを知り、感動した。今後もこの活動が広がっていくことを願っています。」「最近東秩父村から足が遠のいていましたが、今回のお話を聞いてまた出かけてみようと思いました。」などの感想が寄せられた。

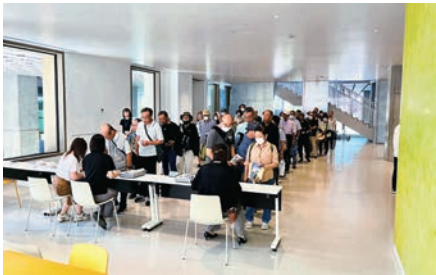


図3.3 入場を待つ受講者



図3.4 クイズを取り入れた発表



図3.5 ゼミ生による活動紹介

3.2 「東秩父村通信」の継続発行

2024年度には、「東秩父村通信」の1号から3号までの発行と、インバウンド訪日外国人旅行者向けの英語版「東秩父村通信」1号を発行することができた。これらはゼミ生が取材テーマを決定し、場合によっては現地の取材対象の方にアポイントメントを取得した上で、東秩父村へ足を運んで取材し、編集し、発行したものであった。

2025年度も、「ふるさと支援隊」の活動の柱として、継続して発行することが決められた。2025年12月に、2025年度の最初の号（通算第4号）が、「高麗祭から発信！東秩父村の魅力」というテーマで発行された。高麗祭で行われた和紙による灯籠作り体験と、教室の床に敷き詰めたマス目を使って遊ぶ「東秩父村すごろく」の報告、さらには地域連携活動報告会の様子が記載されている。

今後は、後述する野球を通しての地元小学生との交流イベントをテーマにした号などが発行される予定である。また、来年度以降も、この東秩父村通信の発行は「ふるさと支援隊」の活動の柱になっていくものと思われる。



図3.6 2025年度「東秩父村通信」最新号

3.3 農作業（稲刈り）への参加

「ふるさと支援隊」では、活動地域での農作業に参加して地元住民と交流を図ることが求められている。2024年度も「稲刈り体験」と「(和紙の原料である) 楮の皮むき体験」をそれぞれ地元住民と共に実施したが、2025年度も同じように実施することとした。

稲刈り体験に関しては、2025年10月3日に実施した。地元の槻川小学校の児童とともに、ゼミ生が稲刈り体験を経験した。泥まみれになりながらも、参加したゼミ生は小学生と共に楽しい時間を過ごすことができた。



図3.7 児童との稲刈り体験

3.4 高麗祭への参加

城西大学及び城西短期大学の学園祭である高麗祭は、2025年11月2日及び3日に実施された。三國ゼミナール4年生は、模擬店運営（焼きそば）のほか、教室での展示活動も行った。「和紙灯籠づくり体験」と「東秩父村すごろく」というコーナーの展示で、来場者に体験してもらうことで東秩父村の魅力について知ってもらうことを目的とした。

3.4.1 和紙灯籠づくり体験

和紙は、東秩父村を代表する名産である。その和紙の魅力を知ってもらおうとゼミ生が企画したが、和紙で灯籠を作ってもらう体験コーナーの運営であった。2日間で20組（約60名）の方が参加してくれた。

高麗祭に向けて、事前に牛乳パックを準備して灯籠の原型を用意した。この原型に、好みの和紙を貼ったり、好きな形に切り抜きしたりして、参加者オリジナルの灯籠を作ってもらった。作業には、ゼミ生がマンツーマンで付き添い、子どもからお年寄りまでたくさんの方に灯籠づくりを楽しんでもらった。「きれいな和紙で灯籠を作る貴重な体験ができた」などと、喜びの声を残してくれる参加者が多くいた。



図3.8 牛乳パックで原型を作る



図3.9 共同作業



図3.10 家族で参加



図3.11 コミュニケーションしながらの作業



図3.12 参加者の作品例

3.4.2 東秩父村すごろく



図3.13 制作過程

子どもたちが遊びながら、自然と東秩父村のことを学べる機会を作ろうと、すごろくの制作が始まった。各コマには、東秩父村に関する情報などが配置された。サイコロを振ってコマを進めながら、東秩父村の自然、歴史、名産などを学んでいける仕掛けとなっていた。カードによる指示があったり、場所ごとに紙幣を手に入れられたり、飽きさせないためのさまざまな工夫もあった。

ボードゲームとしてではなく、教室いっばいにコマを並べて、身体を動かしながら子どもたちに遊んでもらおうというゼミ生の発案で、教室全体を使ってすごろくを展開した。

高麗祭の2日間では、親子連れなど30組の来場者があり、大きなサイコロを振って、楽しんでもらうことができた。「遊びながら東秩父村を知ることができて面白かった」という感想があった。



図3.14 紙幣やカード



図3.15 子どもに説明するゼミ生



図3.16 教室を広く活用

3.5 地域連携活動報告会への参加

毎年、高麗祭の時期に地域連携センターにより開催されている地域連携活動報告会に、経営学部3年生及び4年生ゼミナールとして参加した。パネルに活動内容をまとめ、東秩父村の魅力を伝えるとともに、村が抱える課題や、ゼミ活動の詳細についても報告を行った。

地域の方が立ちどまり、ゼミ生の説明に耳を傾けてくださった。ゼミ生も説明をすることで、自分たちの活動を客観的に見つめ直すことができているようであった。ただ、今年度は、パネルの前にゼミ生が不在である時間が多くあったため、来場者に直接説明する機会を持つことが十分にはできなかった。この点は反省すべき点であり、来年度以降には期間中ゼミ生が常駐するようにしなければならない。

来場者からは、「地域にとってとても意義深い活動」「様々な活動をされていて、感心しました。これからも頑張ってください。」「学生目線で東秩父村について知り、発信することで、村の人が気づかない魅力が引き出せていいと思いました。継続性が課題ということですが、ぜひこの活動を代を越えて続けていってください!」などという肯定的な感想もあったが、一方で、「学生さんからお話を聞きたかったです。」「東秩父村の活動が凝縮されたパネルで、興味がとても沸きました。これだけの取り組みを行っており、感心しました。説明者と会話ができればより良かったです。」などとゼミ生が不在であったことを残念がる感想もあった。



図 3.17 地域の人に説明するゼミ生



図 3.18 2025年度地域連携報告会用のパネル（経営学部3年生 & 4年生ゼミナール）

3.6 農作業（楮の皮むき体験）への参加（予定）

稲刈り体験の記述の際に述べたように、「ふるさと支援隊」の活動内容に関しては、それぞれのゼミナールが自由に設定することができるが、唯一、活動地域での農作業に参加して地元住民と交流を図ることが埼玉県から求められている。東秩父村では、稲刈り体験と和紙の原料である楮の皮むき体験を行うこととしていた。

稲刈り体験に関しては、2025年10月3日に実施したことは述べたとおりであるが、楮の皮むき作業は2026年1月中旬に実施予定であり、数名のゼミ生の参加が予定されている。この体験は、小学生はいないものの、地元の方と長時間一緒に作業する中で、東秩父村に関するさまざまなことを知る機会ともなっている。



図3.19 昨年度の作業の様子

3.7 訪日外国人旅行者へのPR活動（予定）



図3.20 昨年度の様子

さらに2025年度の活動として、今後、実施する予定であるイベントを紹介したい。2026年1月16日に予定しているものとして、浅草周辺で、外国人旅行者に向けた「東秩父村の魅力を伝える」PR活動がある。この活動は、昨年度、2025年1月13日にも実施した。

「東秩父村通信」の英語版とも言えるPRチラシには、東秩父村のイベント情報、カフェ情報、アクセス情報が簡単な英語で記載されている。このチラシを浅草で訪日外国人旅行者に配布しながら、口頭でさらに情報を伝える活動を予定している。

昨年度は、4～5人のチームになって行動し、各チームが、それぞれ10組の外国人旅行者グループに声をかけることを目標にした。英語に苦手意識を持つゼミ生も多いが、いざ活動が始まると、翻訳アプリなどを駆使しながら楽しそうにコミュニケーションしている様子が観察された。

東秩父村の魅力を、海外に向けて発信することが大きな目標であるが、それにとどまらず、ゼミ生同士が親睦を深める貴重な機会にもなっている。この活動も、今後も継続して実施していきたい。



図3.21、22、23 昨年度の様子（PR活動後の訪日外国人旅行者との記念撮影）



図 3.24 浅草で配布予定の英語版チラシ

3.8 野球イベントの開催（予定）

2025年度には地元の小学生との交流機会を持つということを目指し、いくつかのイベントの企画が行われていたが、実現には至っていなかった。4年生が中心となって、学生生活最後にはぜひ実現させようと、もう一度みんなでイベントの企画を考えた際に、野球部に所属するゼミ生のアイデアで、この企画が提案された。

2025年11月24日に、東秩父村において、埼玉ジャイアンツの監督をはじめスタッフの方と打ち合わせを行い、最終的には2026年2月8日に交流イベントが実施されることが決まった。



図 3.25 打ち合わせの様子

このイベントでは、城西大学野球部のメンバーが中心となって小学生たちに野球を教えるほか、陸上競技部や駅伝部のゼミ生が走り方やストレッチの仕方などを教えることを予定している。一緒に身体を動かしながら交流を深めようとするのが活動の主たる目的だ。また、この時の様子を、取材グループが写真撮影やインタビューを行い、後日、東秩父村通信として編集し発行することも、このイベントの活動の一部として予定としている。

4. 「ふるさと支援隊」——2025年度総括と2026年度の展望——

4.1 2年間の活動から見てきた課題

2024年に活動が決まってから、この2年間はあっという間に過ぎていった。現在の4年生を中心として、その中でも幹事となって主体的に活動してくれたメンバーのおかげで、東秩父村通信の発行や各イベントの開催など、東秩父村の魅力を発見して発信する機会を持つことができた。

一方で、2年間の経験から、いくつかの課題も見てきた。こうした課題は、今後、「ふるさと支援隊」の活動を継続させていくためには解決していかなければいけないため、ここで「ふるさと支援

隊」の中間報告会でまとめた資料に基づき、整理しておきたい。

4.1.1 東秩父村の魅力について、もっと知る必要がある

東秩父村での活動をよりよいものにするためには、まず「村の魅力」を自分たちの言葉で語れる状態にしておくことが大切であろう。もっとみんなで東秩父村を訪ねて、景観や食、文化、体験などの魅力を実際に見て、写真やメモで残しながら整理していくことがまず必要だ。その一方で、人口減少や交通、担い手不足、空き家など、地域が抱える課題にも目を向け、魅力と課題がどうつながっているのかを考える。さらには、住民や事業者、行政に携わる方の話を伺い、歴史や背景、いまのニーズを理解することで、表面的ではない課題の本質が見えてくるかもしれない。試食や体験の感想を記録したり、簡単なアンケートを取ったりして、主観と客観の両方の情報を少しずつ蓄積するのも有効であろう。ゼミナールにおいても、学びを共有できる勉強会や「1枚まとめ」を作り、新しく参加するメンバーでも短時間で理解できる状態に整えておく仕掛けを考えることも必要になっていくだろう。

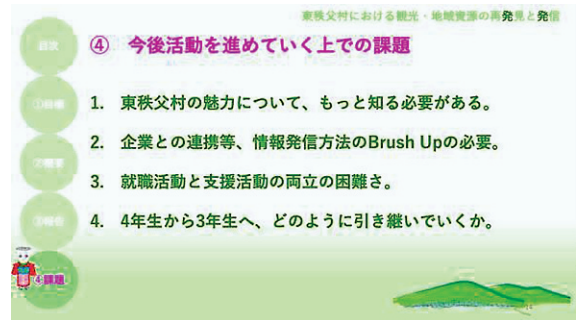


図 4.1 2025年度中間報告会資料

4.1.2 企業との連携等、情報発信方法のブラッシュアップの必要性

活動を広げていくには、企業とのつながりを増やすことと、情報発信の質を高めることの両方も必要になってくるかもしれない。2年間の活動を通して、学生がSNSで発信するだけでは情報の広がりには限界があるのではと感じることが多くなっている。

情報発信について考える際には、「誰に」「何を」「どんな行動につなげたいか」（来訪、購入、参加など）について見通しを立てて、SNSや動画、Web、紙媒体を使い分けることも必要となろう。投稿の雰囲気やデザインをそろえ、写真の許可や注意点もチームで共有しながら、無理なく続けられる投稿計画を作る。反応（閲覧数、保存数、問い合わせなど）を見て小さく改善を重ね、村・企業・学生の三者にとってよい形になるよう、少しずつ磨き上げていくことも重要になってくるかもしれない。

4.1.3 就職活動と支援活動の両立の困難さ

ゼミ生の就職活動が始まると、説明会や面接、書類作成などで予定が不規則になり、地域活動に参加しづらくなることがある。就職活動の早期スタートの世の中の流れが、この傾向に拍車をかけている。だからこそ「全員が毎回参加する」前提ではなく、関わり方に幅を持たせた体制づくりが大切になってくるだろう。たとえば、短時間でできる作業（投稿文の下書き、写真整理、資料チェック）と、現地に行って対応する作業（取材、イベント運営）を分け、状況に合わせて役割を選べるようにする。オンライン会議や共有フォルダを活用して情報をまとめ、担当と締切りをはっきりさせておくと、忙しい時期でもチームとして動きやすい。就職活動の選考が集中する週は無理をしないで「今週は参加を抑える」と言える雰囲気を作り、代わりの担当者を決めておけば安心だろう。参加の評価も、時間

の長さだけでなく成果物やチームへの貢献を「見える化」することで、納得感を保ちやすくなるかもしれない。無理なく続けながら、就活で身につく力も活動に生かしていける形を目指すことを考えてい。

4.1.4 4年生から3年生へ、どのように引き継いでいくか

「ふるさと支援隊」の活動を次の学年につなげていくためには、経験やノウハウが特定の人に偏らないようにすることが大切となるだろう。まず、関係者の連絡先や年間の流れ、打ち合わせ内容、予算、広報素材などを「活動台帳」等としてまとめ、必要な情報にすぐアクセスできるように整えておく。あわせて、フォルダの整理方法やファイル名の付け方もそろえておくと、後から見返すときに助かるだろう。引き継ぎは、年度末に一度だけ行うよりも、早い段階から3年生を巻き込み、4年生と3年生がペアで動く形が安心になるかもしれない。4年生が主担当のうちに、3年生には副担当として同行してもらい、「なぜその判断をしたのか」も含めて共有する。小さな仕事を少しずつ3年生に任せ、4年生は見守りとサポートに回ることで、自然と自走力が育つ。最後に、振り返りやチェックリスト、投稿例などを成果物として残し、次年度の計画案までセットで渡せると、引き継ぎがよりスムーズになると思われる。

4.2 2026年度展望

2026年度の3年生及び4年生も、ゼミ生の人数は従来と大きな変わりはない。ただ、2024年度の「ふるさと支援隊」の最初の世代となった現在の4年生が卒業していくことから、今後の活動の中心となって主体的に活躍してくれるゼミ生がどれだけ出てきてくれるかが、一つのカギとなると考えている。大いに期待するとともに、ゼミ生の主体性を促すような仕掛けを、教員側でも用意していきたいと考えている。

5. おわりに

以上が、経営学部3年生及び4年生ゼミナールの、東秩父村における活動に関しての教育実践報告である。

2026年度も、経営学部3年生及び4年生ゼミナールが「ふるさと支援隊」として活動を継続させられるだけでなく、その活動内容をより充実させることができたらと考えている。ゼミ生全員の「協創力」を発揮していきたい。特に、今までの活動の中心であった世代が卒業してしまうことから、また新たな活動の取り組みを模索していきたい。

大学の一つのゼミナールが地域社会の発展に少しでも貢献すること、その一方で、地域社会との関わりを通して学生一人ひとりが少しでも成長していくこと、この双方を同時に達成できれば、地域連携の授業に携わる者としてこれ以上の喜びはないと、同じ思いを抱き続けている。